

# 万葉集 334 番歌の「不忘之為」の解釈について

竹生 政資\*

## An Interpretation of the Last Phrase of the 334th Poem in Manyo-shu

Masasuke TAKEFU

### 要 旨

万葉集 334 番歌「忘れ草 我が紐に付く 香具山の 古りにし里を 忘れむがため」は、大伴旅人が故郷の明日香をなかなか忘れることができず、忘れ草を衣の下紐に付けるという内容の歌である。結句の原文は多くの写本に「不忘之為」とあり、古くは本居宣長により「忘れぬがため」と訓読され、「忘れない故に」と解されていた。ところが、万葉集の「ため」は「目的・便益」の意味でのみ用いられ、「原因・理由」で用いられることはないことから、澤瀉久孝氏と大野晋氏によって原文は「忘之為」が正しいとされ、「忘れむがため」と訓読し、「忘れようとして」と解するのが通説となっている。

ところが、この通説には疑問がある。万葉集では「～むため」や「～むがため」という表現はすべて「実現可能性のあること」に対して用いられているからである。忘れ草を衣の下紐に付ける程度のことでは故郷が忘れられるはずがない。したがって、この歌のような文脈で「忘れむがため」という表現が用いられることは考えられないのである。本論文は、諸本の原文「不忘之為」に従い「忘れぬがため」と訓読し、これを「忘れないことのため＝『忘れない病』のため」と解する案を提案する。

### 1. はじめに

本論文で取り上げる万葉集 334 番歌は、万葉集巻三の「雑歌」に分類された 155 首の中の一詩である。作者は大伴旅人で、明日香の藤原京から奈良の平城京へ都が移った後、明日香の故郷がなかなか忘れられず、忘れ草を衣の下紐に付けるという内容の歌である。本論文の目的は、要旨でも述べたように、この歌の結句の解釈について再検討することである。そのためにまず歌の内容（訓読文と原文）を新日本古典文学大系本に従って掲載することから始めよう[1]。

03/334 忘れ草 我が紐に付く 香具山の 古りにし里を 忘れむがため

【原文】萱草 吾紐二付 香具山乃 故去之里乎 忘之為

次に、先行研究の概要を知るために、代表的な万葉集注釈書に掲載されている訓読文、現代語訳、注釈を出版年の新しいものから順に掲載する。記載形式をそろえるため内容に影響を与えない範囲内

---

\*佐賀大学 医学部 地域医療科学教育研究センター (takefu@cc.saga-u.ac.jp)  
公開鍵指紋：11C0 DBB6 369C DB72 DD3A B122 EF6B 5B5E B99A C2E7

で順序や記号表記などを一部変更し、漢字の旧字体は新字体で置き換えた。

#### ① 新日本古典文学大系<sup>[1]</sup>

【訓読文】 忘れ草 我が紐に付く 香具山の 古りにし里を 忘れむがため

【現代語訳】 忘れ草を私の衣の下紐に付ける。香具山の故郷を忘れようとして。

【注釈】 結句の原文、西本願寺本など「不忘之為」であるが、類聚古集は「王心之為」に作る。後者の文字から「忘之為」という原本文を推定した沢瀉『注釈』の説に拠って「わすれむがため」と訓み解する。古代語の「ため」は、目的を表す場合にのみ用い、理由・原因を意味する場合は「ゆゑ」の語が用いられた。「忘れ草」の原文は「萱草」。漢語「萱草」「諼草」は、庭に植え、眺めて憂いを忘れる草として中国の詩文に描かれる。「いづくんぞ諼草を得て、われこれを背に植ゑん」（詩経・衛風・柏兮）は、北堂（背）に植えて、出征した夫への憂思を忘れたいと歌う。草から忘却を思うのはやや特殊な連想であり、「忘れ草」は漢語「萱草」の翻訳語かと思われる。特に「いづくんぞ忘帰の草を得て、われ背と襟とに樹ゑん」（晋・陸機「贈従兄車騎」・文選二十四）の「忘帰草」は、郷愁を忘れる草という点でも、この歌と趣向が一致する。陸機の詩の「背」「襟」は、正しくは北の庭、南の庭であるが、それを文字どおりに背中と胸元ととる解釈があり（唐・顔師古・匡謬正俗）、また「懐に忘憂の草を挟む」（南朝宋・劉義恭「遊子移」）という詩句も見られるので、「忘れ草」を衣の紐に付けるという発想は、そのような解釈や表現の受容からも生まれ得る。「忘れ草」は、万葉集に他に、七二七・三〇六〇・三〇六二。「恋忘れ草」という語例もある（二四七五）。「忘れ貝」（六八）、「恋忘れ貝」（九六四）もよく詠まれた。

#### ② 新編日本古典文学全集<sup>[2]</sup>

【訓読文】 忘れ草 我が紐に付く 香具山の 古りにし里を 忘れむがため

【現代語訳】 忘れ草を わたしの下紐に付ける 香具山の 古い京を 忘れるために

【注釈】 忘れ草——ゆり料の多年草やぶかんぞうの古名。道端や田の畦などに生え、六月頃高さ一メートル余にも達する花茎を出し、その頃に数個の黄赤色の花（多くは八重咲き）を付ける。『文選』（巻第五十三「養生論」）に「萱草ハ憂ヲ忘レシム」とあり、これを身に付けると憂苦を忘れるという漢籍に基づく俗信があった。

#### ③ 講談社文庫（中西進）<sup>[3]</sup>

【訓読文】 忘れ草 我が紐に付く 香具山の 故りにし里を 忘れむがため

【現代語訳】 わすれ草を私は紐につける。香具山がなつかしい、あの故郷を忘れようとして。

【注釈】 わすれ草——萱草（かんぞう）。人をして憂いを忘れさせる草（毛詩）。○故りにし里——明日香故郷。旅人にとって奈良も故郷である。香具山は風景の中心として想われるもので、居宅をその近くと考える必要はない。○忘れ——原文底本は「不忘」。「王心」（類・紀）などあり「王心」を「忘」の誤りとして採る。苦しみの為忘れようとして。

#### ④ 万葉集註釈（澤瀉久孝）<sup>[4]</sup>

【訓読文】 萱草 我が紐につく 香具山の ふりにし里を 忘れむが為

【現代語訳】 萱草を自分の紐に着ける。香具山のあたりの古里を忘れようと思つて。

【注釈】 萱草——和名抄（十）に「萱草、兼名苑云、萱草、一名忘憂（萱音喧、漢語抄云、和須礼久

佐)」とある。毛詩の衛風に「焉得諼草、言樹之背」とあり、毛伝に「諼艸令人忘憂、背北堂也」と注す。「諼」又「萱」に作るといふ。文選（五十三）嵇叔夜（康）の養生論にも「合歡蠲忿、萱草忘憂、愚智所共知也」とある。これらの文献によつて既に支那で「わすれぐさ」と考へられてゐて、我が国でもそれによつたものと思はれる。百合科の萱草である。

吾が紐につく——「紐」の字については前（二五一）に述べた。「萱草 吾下紐爾 著有跡」（四・七二七）ともあつて、そこには下紐とある。右に衛風の句を引いたが、文選（廿四）、陸士衡の贈従兄車騎詩にも「安得忘歸草、言樹背與襟」（襟は前の意）とあり、作者はこれらの句を思ひつゝ吾が紐に着くと云つたのであらう。

香具山のふりにし里を——大伴氏の遠祖道臣命に筑坂邑に宅地を賜はつた記事が神武紀二年の条に見えてゐるので、代匠記に「此等モ相伝セラレケル歟」とあるが、それは橿原市の南部であつてここには当らず。香具山の麓、おそらくはその南、即ち飛鳥の都のうちにその居宅があつたのであらう。それが今は奈良の新都へ引移つたので、ふりにし里と云つたのである。

忘れむが爲——流布本には「不忘之為」とあつてワスレヌガタメと訓まれてゐたが、考には「将忘之為」の誤としてワスレムガタメとした。然るに玉の小琴は旧本のまゝで「忘れぬ故にと云はむが如し」と云ひ以後の諸注いづれもそれに従ふに至つた。後世では「雨がふつた為に延期になつた」とか、「あなたの為にひどい目にあつた」とか、「為」といふ言葉を「故」といふ言葉と同じやうに用ゐるやうになつたから玉の小琴の説が疑はれずに認められたのであるが、

和芸毛故尔 美勢牟我多米尔 母美知等里弓牟（十九・四二二二）

緑兒之 為杜乳母者 求云（十二・二九二五）

和我世故我 可反里吉麻佐武 等伎能多米 伊能知能己佐牟（十五・三七七四）

後見多米尔 標結申尾（七・一三四二）

などの如く、次の思惟、動作の目的を示す場合にのみ用ゐられてゐて、原因を示す場合には他に一つも用ゐられてゐない。原因を示す場合は「人妻故に」（一・二一）の条で述べたやうに「故」が用ゐられ、「為」と「故」とははつきり区別されてゐる。そこで本文をよく調べると類聚古集には「不忘」が「王心」と訓まれる二字になつてをり、紀州本には本文は「不忘」とあるが、左にこれも「王心」とある。「王心」では意を成さず、今日まで顧られなかつたのも尤もと思はれるが、類聚古集にはその「王」が草体で書かれてゐる。そこで考へると、その「王」の草体はまた「己」の草体とも極めて似る事があるので、「己」の草体から誤つたものでないかといふ推定は十分認められる事だと思ふ。さうだとすると、これはもと「忘」の一字であつたものが、その上半の「亡」が「己」の字に近い書体に書かれるところから「己心」の二字に誤り、その「己」がまた草体によつて「王」に誤つたものと私は考へる。その事は類聚古集の訓にワスレシカタメとあり、仙覚抄によるとそれが古点であり、もと「不」の文字に相当する訓も無かつた事によつて確められる。それが、ワスレシカタメでは意が通ぜず、また「為」と「故」との語意も混同するやうになり、さかしらに「不」の字が加へられ、仙覚によつてワスレヌカタメと改訓せられるに至つたものと思はれるのである。しかし右に述べたやうに類聚古集の漢字を超えて原本には「忘之為」とあつたと認め、ワスレムガタメと訓むべきであるとすれば、集中に於ける「為」の用語の唯一つの例外を設ける必要もなく、忘れ難き苦しさを忘れむと願ふ古人の心にもかなひ、すべておだやかにおちつくのである。しかもその訓ははじめにあげたやうに既に考に説くところであるが、それは「不」を「将」の誤としたところに問題が残されたので、「不」を衍字として「忘」一字をワスレムとムを訓添とすれば、同じ作者の「行見為」（三三二）の用字例ともかなふ事になつて問題はすつかり解決されるのである。くはしくは「古写本の誤を超えて」（女子大國文、

第三号、昭和卅一年一月、『歌人の誕生』所収) 参照。大野晋氏(「萬葉集訓詁新見」、解釈と鑑賞、第廿一卷第十号、昭和卅一年十月)にも同じ説がある。同氏の説は後に発表されてゐるが、私の発表を見てみられなかつたので、私の説と無関係に同じ意見を考へられたものである事を附記しておく。

【考】初二句を同じくするものに、

萱草吾が紐に着く時となく思ひ渡れば生けりとも無し(十二・三〇六〇)

がある。

(著者注。わすれ草の写真と類聚古集の334番歌の写真は省略した。)

## ⑤ 日本古典文学大系<sup>5)</sup>

【訓読文】わすれ草 我が紐に付く 香具山の 故りにし里を 忘れむがため

【現代語訳】わすれ草を自分は紐につける。香具山のあたりのあの懐しい故郷をひとときでも忘れていたために。

【注釈】わすれ草——萱草(かんぞう)。憂えを忘れる草とされていた。○紐——下紐か。○忘れむがため——忘れるために。タメは奈良時代には目的を表わす。原因を表わすにはユエ・カラを用いた。→補注。

【補注】忘れむがため 底本、「不忘之為」とあるが、類聚古集と紀州本に不の字がなく、王心と書いてある。王心は二字ではなく一字に合せられるべきもの。忘は、忘の当時の字体である。してみれば原文は「忘之為」となり、ワスレムガタメと訓むべきものとなる(沢瀉久孝博士説)。タメは現代では目的を表わすだけでなく、原因や理由をも表わすが、奈良時代では原因や理由を表わすのは主としてユエの役割で、タメは将来の利益を期した目的を表わすのが主たる意味であった。「君が為」「我が為」「帰り来まさむ時の為命残さむ」「吾妹子が心慰さにやらむ為」「吾妹子に見せむが為に」これらすべて、将来に関する事で、役に立つように、利益になるようにという意味である。→二一補注「人妻ゆゑに」

上に示した五つの先行研究を見ると、訓読文も現代語訳もほぼすべて同じ内容であることがわかる。334番歌の結句の原文は、多くの写本に「不忘之為」とあるけれども、上に示した五つの先行研究はすべて「忘之為」を正しい原文としている。その理由については、上の④の注釈で澤瀉久孝氏が詳しく述べている。⑤も同様なことを述べている。

次の第2節では、まず334番歌の結句に関する従来の解釈の問題点を指摘し、続く第3節でこれらの問題点を解決できる新たな解釈を提案する。

## 2. 先行研究における問題点

334番歌の結句に関する通説には少なくとも二つの問題点がある。第一に、通説は正しい原文を「忘之為」とするが、類聚古集(と紀州本の添書)以外のすべての写本に「不忘之為」とあり、類聚古集(と紀州本の添書)では「不忘」に相当する部分が「忘」ではなく「王心」となっている。澤瀉久孝氏は、前節の注釈④で、類聚古集の「王心」の本来の形は「忘」であり、したがって334番歌の結句の原文は「忘之為」が正しく、多くの写本で「不忘之為」となっているのは後に「不」の字が付加されたためだろうと推測している。注釈⑤も同様なことを述べている。しかしながら、このようなやり方は本末転倒であろう。多くの写本が「不忘之為」で一致しているのに、「忘」の字さえまともに筆写

できずに「王心」と誤写している類聚古集を信用すべき理由がどこにあるのだろうか。これが通説の第一の問題点である。

ちなみに、通説があえてこのような無理をする背景には以下のような事情がある。もし結句を「不忘之為」として「忘れぬがため」と訓むならば、その解釈は本居宣長が行ったように「(なかなか故郷を) 忘れない故に」となる。しかし、その後の研究で、上代(奈良時代以前)の「ため」はもっぱら「目的・便益」を表すために用いられ、「原因・理由」には「ゆゑ」などが用いられていることが判明した[6]。実際、万葉集には 334 番歌のほかに「ため」が 62 例あるが、例えば「君に逢はむため」(604 番歌)や「妹がため我れ玉拾ふ」(1665 番歌)など、すべて「目的・便益」の意味で用いられており、例外はない。そうすると、宣長のように「忘れぬがため」を「(なかなか故郷を) 忘れない故に」と解することはできず、「(故郷を決して) 忘れない目的で」と解するしかなくなる。ところが、「故郷を忘れない目的で、忘れ草を紐に付ける」というのは明らかに 334 番歌の文脈に反する。そこで原文「不忘之為」の「不」を衍字と見なして「忘之為」と改訂し、これを「忘れむがため」と訓み、「故郷を忘れようとして、忘れ草を紐に付ける」という解釈で決着し、これが今日の通説となっている。

しかしながら、実は、結句を「忘れむがため」と訓んだからといって問題は解決しない。これが通説の第二の問題点である。問題は「忘れむがため」の「む」にある。助動詞「む」は一般には「推量」を表すが、発話者の行為に用いる場合は本人の「意志」を表し、本人の努力によって実現する可能性がある場合に用いられる。実際、今問題の 334 番歌を別にすると、万葉集には「～むため」が 12 例、「～むがため」が 1 例あるが、すべて実現可能性のあることに対して用いられている。

そこで、334 番歌の文脈を考えてみると、故郷を忘れようとしてなかなか忘れられずに困っている時に、忘れ草を紐に付ける程度のことで故郷を忘れることができるだろうか。可能性はゼロである。このことは、この歌の作者である大伴旅人はもとより、当時の大人も子供も誰でも知っていることである。だとすれば、忘れ草を紐に付ける程度のことで「故郷を忘れよう」と「意志」の表現をすることはありえない。すなわち、334 番歌の結句が、もし通説が言うように「忘れむがため」であるならば、この歌の作者は、忘れ草を紐に付ける程度のことで故郷が忘れられるはずもないことを百も承知しながら、「故郷を忘れようという目的で、衣の下紐に忘れ草を付ける」という「見え透いたウソ」の歌を詠んでいることになる。

このような指摘に対して、次のように反論する人がいるかも知れない。すなわち、昔から文学に「ウソ」はつきもので、李白の「白髮三千丈」は極端としても、万葉集にも

04/0742 一重のみ 妹が結ばむ 帯をすら 三重結ぶべく 我が身はなりぬ

04/0743 我が恋は 千引の石を 七ばかり 首に懸けむも 神のまにまに

のような明らかに現実離れした「ウソ」の表現があるではないか、と。しかし、この「ウソ」はあくまでも「誇張」あるいは「比喩」の表現であり、「現実にはそんなことがありえないことはよくわかっているが、今の自分の気持ちとしては、あたかもそんな状態にでもなったような気がする」という気持ちの表現である。だから、このような表現に対して、「お前はウソを平気で言うやつだ」とは誰も言わない。むしろ言おうとする気持ちの切実さが読者によく伝わり、共感を得るのに役立つのである。

ところが、通説による 334 番歌の解釈に含まれる「ウソ」は、このような単なる「誇張」や「比喩」の表現とはまったく次元の異なるものである。というのは、もし 334 番歌を通説のように「故郷を忘れようがために、衣の下紐に忘れ草を付ける」と解するならば、これは単なる誇張や比喩の歌ではな

く、忘れ草を下紐に付ける程度のことで故郷を忘れることができると「本気で」信じ込んでいる（あるいはそのように意図的に装っている）、いい年して分別のない男の歌になってしまうからである。このような内容の歌に共感する人がいるだろうか。通説による 334 番歌の解釈は、はっきり言って、作者の同伴旅人に対してきわめて失礼な解釈であろう。というのは、万葉集を代表する「ますらお風」の歌を詠む彼の歌を、よりによって、オトギ話の世界と現実の区別もつかない愚かな男の「見え透いたウソ」の歌だと解しているようなものだからである。

ちなみに、前節の先行研究④の最後の記述によると、現在行われている 334 番歌の通説は、昭和 31 年に澤瀉久孝氏と大野晋氏の二人が「独立に」発見した解釈のようであるが、以上の指摘からもわかるように、この通説には少なくとも二つの大きな問題点が存在するのである。

### 3. 万葉集 334 番歌の新しい解釈

この節では、まず正しいと思われる解釈結果を示し、その後に根拠を示すことにしよう。まず 334 番歌の原文、訓読、直訳、意識を示す。

【原文】萱草 吾紐二付 香具山乃 故去之里乎 不忘之為

【訓読】忘れ草 我が紐に付く 香具山の 古りにし里を 忘れぬがため

【直訳】忘れ草を私の衣の下紐に付ける。香具山の故郷を忘れないことのため。

【意識】忘れ草を私の衣の下紐に付ける。香具山の故郷をなかなか忘れないという「忘れない病」に対処するため。（「忘れない病」の苦しみをほんの少しでも軽減させるために、「溺れる人が藁をつかむ」のと同じ心境で「忘れ草」を衣の下紐に付ける。）

上に示した新しい解釈のポイントは、結句を諸本の原文「不忘之為」のままで「忘れぬがため」と訓み、「忘れぬ」のあとに「こと」が省略されていると見て、「(なかなか故郷を) 忘れないことのため」と解する点である。「忘れないこと」とは、具体的には「故郷をなかなか忘れないという『忘れない病』にとりつかれてなす術のない状態に陥っていること」を表している。結句の「忘れぬがため」をこのように解すると、「ため」が「目的・便益」の意味をもつようになる。というのは、上の意識にも示したように、作者が忘れ草を紐に付ける行為を、溺れている人が藁をつかむ行為に喩えて理解することができるからである。溺れている人が藁をつかんだからといって助かる可能性はゼロである。しかし、それでも溺れる人は藁をつかむ。溺れる人が藁をつかむのは「助かろう」と思うからではなく、溺れる苦しみをほんの少しでも軽減させたいためである。今の歌の場合も同じ心境である。

新しい解釈で「ため」が「目的・便益」の意味をもつことは、「薬を飲む、風邪のため」という現代口語の例からもよくわかる。この例では「ため」は「風邪が原因で薬を飲む」のように「原因」と解することもできるが、むしろ「風邪をよくするために薬を飲む」と「目的・便益」の意味に解することもできる。今問題の 334 番歌の場合もこれと同じである。ただ違うところは「忘れない病」に対しては効く薬がない点である（だから「忘れ草」のようなものにまで手を出す）。

以上のことから、この歌の作者が忘れ草を紐に付けるのは、通説が言うように「(そうすることで) 故郷を忘れてやろう」と思うからではなく、あくまでも（故郷を忘れることができないのは承知の上で）「忘れない病」の苦しみをほんの少しでも軽減させるためである。あるいは「忘れない病」に対してなす術がないので（徒労に終わることは承知で）「忘れ草にすがる」ことでも試してみる以外に方法

がないからである。「忘れない病」は、少し後で例を示すように、「恋の病」と同じく、人間にとっては「なす術のない」病なのである。以上のような解釈によって初めて、334 番歌は李白の「白髪三千丈」と同じような文学的な「誇張」表現の歌となる。このような内容であってこそ共感できるし、また万葉人の「ますらお風」の歌とも言えるだろう。戦場においてはどんな敵をも恐れず突き進む「ますらお」と言えども、「忘れない病」に対してはなす術をもたないことを率直に告白しているのである。当事者でない人から見ればバカバカしく見える「忘れ草にすがる」ようなことできえ、あえて試してみるほかになす術がないのである。

このような解釈は、ほかの忘れ草の歌ともコンシステントである。

12/3060 忘れ草 我が紐に付く 時となく 思ひわたれば 生けりともなし

04/0727 忘れ草 我が下紐に 着けたれど 醜の醜草 言にしありけり

最初の 3060 番歌は、忘れ草を紐に付けることによって「忘れてやろう」というのではなく、何もしないでいると「忘れない病」にとりつかれて生きた心地がしないので、「溺れる人が藁をつかむ」のと同じように「忘れ草にでもすがるしかない」という気持ちを詠んだものである。また、次の 727 番歌も、「忘れてやろう」と思って忘れ草を紐に着けたのではなく、その草の名前からして、たとえわずかなりとも「忘れない病」の苦しみが和らぐかと思って紐に着けてみたけど、やはり効果はゼロだった、と嘆いている歌である。ちなみに、「忘れない病」だけでなく、「恋の病」に対しても「ますらお」はなす術をもたないことを次のような歌で告白している。

11/2635 剣大刀 身に佩き添ふる 大夫や 恋といふものを 忍びかねてむ

12/2907 ますらをの 聡き心も 今はなし 恋の奴に 我れは死ぬべし

さて、残された課題は次の二つである。第一の課題は、「不忘之為」を「忘れぬがため」と訓むことができる根拠を示すことである。第二の課題は、「忘れぬがため」の意味として、「忘れぬ」のあとに「こと」が省略されていると見て「(なかなか故郷を) 忘れないことのため=『忘れない病』のため」と解することができる根拠を示すことである。

まず第一の課題から始めよう。もし前後の歌の文脈を考慮しなければ、原文の「不忘」は「忘れぬ」または「忘れじ」と訓むことができる。実際、「不」を「～ぬ」と訓む例としては、「見ぬがすべなき(不見之為便奈沙)」(754 番歌) や「咲かぬが代しろに(不開之代尔)」(1642 番歌) などがあり、一方、「不」を「～じ」と訓む例としては、「遂げじと思はめ(不遂登思齒目)」(1382 番歌) や「逢はじものかも(不相物可毛)」(2087 番歌) などがある。したがって、334 番歌の結句「不忘之為」は「忘れぬがため」とも訓めるし、あるいは「忘れじがため」とも訓める。いずれを採るべきかは文脈による。まず、「忘れじがため」と訓んだ場合、「(故郷を) 決して忘れないために」という意味になるが、これは明らかに文脈に反する。よって、今の場合「忘れぬがため」と訓むことになる。

次に第二の課題として、「忘れぬがため」の意味について考えよう。現代語の感覚からすれば、「忘れぬがため」は「忘れないため」と同じで、結果として「決して忘れないために」という「意志」を表わす意味になりそうだが、実はそうではない。この意味になるのは助動詞「じ」を用いて「忘れじがため」と訓んだ場合であって、「忘れぬがため」は「意志」を含まず、まったく異なった意味になる。結論から言えば、「忘れぬがため」は「忘れぬことがため」の「こと」が省略された形であり、「忘れ

ないことのため」という意味になる。以下にその証拠を示そう（カッコ内は原文）。

08/1642 たな霧らひ 雪も降らぬか 梅の花 咲かぬが代しろに（不開之代尔）そへてだに見む  
04/0757 遠くあれば わびてもあるを 里近く ありと聞きつつ 見ぬがすべなさ（不見之為  
便奈沙）

最初の歌の第三句「咲かぬが代に」は「咲かぬ（こと）が代に」の省略形で「（梅の花が）咲かないことことの代わりに（雪を花になぞらえて見よう）」の意である。また、次の歌の結句「見ぬがすべなさ」も、「見ぬ（こと）がすべなさ」の省略形で「（あなたが里近くにいると聞きながらあなたを）見ないことことのすべなさよ」という意味である。このような「こと」の省略は、次の例に見られるような「もの」の省略とも似た現象であろう。

07/1069 常はさね 思はぬものを この月の 過ぎ隠らまく 惜しき宵かも  
12/3100 思はぬを 思ふと言はば 真鳥住む 雲梯の杜の 神し知らさむ

この二つの歌の「思はぬものを」と「思はぬを」は、ともに「思わないのに」という同じ意味であるから、「思はぬを」は「思はぬものを」の「もの」が省略された形だと考えられる。

以上見てきたように、結論として、334番歌の結句「不忘之為」の訓みは「忘れぬがため」であり、意味は「忘れないことのため」、すなわち『「忘れない病」のため』となる。このような解釈は歌の文脈にも合致する。

#### 4. おわりに

本論文では、この約半世紀にわたって通説とされてきた334番歌の結句について再検討を行った。通説は、多くの写本にある「不忘之為」の「不」を衍字と見なして「忘之為」と改訂し、「忘れむがため」と訓み、「（故郷を）忘れようとして」と解釈するものであった。しかし、このような原文改訂には問題があり、また「忘れむがため」という訓読文も文脈に合わないことを指摘した。結論として、334番歌の結句は「不忘之為」が正しく、これを「忘れぬがため」と訓み、その意味として「忘れぬことことがため」の「こと」が省略されたものと見て「忘れないことのため」、すなわち『「忘れない病」のため』と解する解釈案を提案した。以上のような指摘や解釈がはたして妥当なものであるかどうか、多くの方々のご批判をおおぎたい。

#### 参考文献

- [1] 「萬葉集 一」、新日本古典文学大系、岩波書店、p.233、p.301、1999年。
- [2] 「萬葉集①」、新編日本古典文学全集、小学館、p.205、1994年。
- [3] 「万葉集 原文付全訳注（一）」、中西進、講談社文庫、pp.208-209、1978年。
- [4] 「萬葉集注釋 卷第三」、澤瀉久孝、中央公論社、pp.284-287、1958年。
- [5] 「萬葉集 一」、日本古典文学大系、岩波書店、pp.174-175、p.351、1957年。
- [6] 「時代別 国語大辞典 上代編」、三省堂、2005年。